

四条金吾殿御消息

文永八年九月二日 五〇歳

度々の御音信申しつくしがたく候。さてもさても去ぬる十二日の難のとき、貴辺竜たつのくちまでつれさせ給ひ、しかのみならず腹をきらんと仰せられし事こそ、不思議とも申すばかりなけれ。

日蓮過去に妻子・所領・眷属等の故に身命を捨てし所いくそばくかありけむ。或は山にすて、海にすて、或は河、或はいそ等、路のほとりか。然れども法華經のゆへ、題目の難にあらざれば、捨てし身も蒙こむる難等も成仏のためならず。成仏のためならざれば、捨てし海・河も仏土にもあらざるか。

今度法華經の行者として流罪・死罪に及ぶ。流罪は伊東、死罪はたつのくち。相州のたつのくちこそ日蓮が命を捨てたる処なれ。仏土劣におとるべしや。其の故はすでに法華經の故なるがゆへなり。經に云はく「十方仏土の中には、唯一乗ただの法のみ有り」と、此の意なるべきか。此の經文に一乘法と説き給ふは法華經の事なり。十方仏土の中には法華經より外は全くなきなり。「仏の方便の説をば除く」と見えたり。若し然らば日蓮が難値にあう所ごとに仏土なるべきか。娑婆世界の中には日本国、日本国の中には相模国、相模国の中には片瀬、片瀬の中には竜口たつのくちに、日蓮が命をとゞめをく事は、法華經の御故なれば寂光土ともいうべきか。神力品に云はく「若しは林中に於ても、若しは園中に於ても、若しは山谷曠野せんごくこうやにてても、是の中に乃至般涅槃したまふ」とは是か。

かゝる日蓮にともなひて、法華經の行者として腹を切らんと給ふ事、かの弘演が腹をさいて主の懿公がきもを入れたるよりも、百千万倍すぐれたる事なり。日蓮靈山にまゐりて、まず四条金吾こそ、法華經の御故に日蓮とを同なじく腹切らんと申し候なりと申し上げ候べきぞ。

又かまくらどのの仰せとて、内々佐渡の国へつかはすべき由承り候。三光天子の中に月天子は光物ひかりものとあらはれ竜口の頸くびをたすけ、明星天子は四・五日已前に下りて日蓮に見参し給ふ。いま日天子ばかりのこり給ふ。定めて守護あるべきかと、たのもしたのもし。法師品に云はく「則ち変化の人を遣はして、之が為えごに衛護と作さん」と、疑ひあるべからず。安樂行品に云はく「刀杖も加へず」と。普門品に云はく「刀つ尋いで段々に壊れなん」と。此等の經文よも虚事にては候はじ。強盛の信力こそありがたく候へ。恐々謹言。

文永八年九月二十一日

日蓮花押

四条金吾殿